

がん患者の妊孕性温存療法における看護師の支援に関する文献検討

○柿本 祐来（社会医療法人三栄会 ツカザキ病院）

藤本 夢果（北播磨総合医療センター）、堀 理江（神戸常盤大学）

I. はじめに

近年では、Adolescent & Young Adult（思春期・若年成人、以下「AYA」とする。）世代のがん患者が増加傾向にあり、年間約2万人のAYA世代の方が、新たにがんの診断を受ける。AYA世代にがんが診断されると、病気や治療への不安、進学、就労、結婚、出産などさまざまな問題がある。本研究では、AYA世代がん患者の妊孕性温存に関する看護支援を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

データ収集は、医学中央雑誌 Web 版を使用し、「妊孕性」「がん」を組み合わせ検索し、会議録を除き、看護、原著論文に限定し174件の文献を抽出、そのうち、AYA世代がん患者、妊孕性温存療法について記述されている文献13件を対象とした。分析方法は、論文ごとに、がん患者の妊孕性温存療法における看護師、患者の思いに関する記述を抽出し、類似性に基づいてサブカテゴリーに分類し、さらに抽象度をあげてカテゴリー化した。

III. 結果

以下の6つのカテゴリーと17個のサブカテゴリーが抽出された。

1. 【支援が困難である】は、《将来のビジョンがなく支援が困難である》《妊孕性の話題に踏み込むことが困難である》など5個のサブカテゴリーで構成された。
2. 【知識が不足している】は、《妊孕性温存に関する知識が不足している》《妊孕性温存の介入の必要性に気づくことが困難である》の2個のサブカテゴリーで構成された。
3. 【治療が優先される】は、《がん治療が優先される》《がん治療に向き合う》などの3個のサブカテゴリーで構成された。
4. 【体制不備がある】は、《妊孕性温存のための体制に不備がある》《妊孕性温存にかかわる人の価値観が異なる》の2個のサブカテゴリーで構成された。
5. 【意思決定が困難である】は、《相談先に迷う》《経済的な負担がある》など2個のサブカテゴリーで構成された。
6. 【情報整理を支援する】は、《妊孕性温存に対する情報が不足している》《情報が多いことに戸惑う》の2個のサブカテゴリーで構成された。

IV. 考察

妊孕性温存療法は今までがん治療により、妊孕性の機能が低下し、子どもを諦めるしかなかったがんサバイバーにとって希望の光になっている反面、命と子どもどちらを優先すればいいのか、医療の進歩により妊孕性温存という新たな問題が加わったことでさらに患者の意思決定を困難にしていることが分かった。また、日本癌治療学会による妊孕性に関する診療ガイドラインは2017年に作成され、看護師自身も妊孕性温存療法に繋がる看護介入の経験者が少ないことから知識が不足していることが分かった。